



TITLE:

雍正帝の賤民開放令について

AUTHOR(S):

寺田, 隆信

---

CITATION:

寺田, 隆信. 雍正帝の賤民開放令について. 東洋史研究 1959, 18(3): 364-381

ISSUE DATE:

1959-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/148157>

RIGHT:

## 雍正帝の賤民開放令について

寺 田 隆 信

### 一

乾隆二年<sup>(一七三七)</sup>九月、乾隆帝は、二年前に世を去つた父・雍正帝の聖德神功碑を、その陵寢である泰陵に建てた。

碑文は帝自ら筆をとつたもので、その全文は、實錄乾隆二年九月壬辰の條、及び皇朝文獻通考卷百五十二王禮考にみえているが、要するにそれは、雍正帝の德を讃えるとともに、比較的短い十三年の治世ではあつたけれども、その間孜々として國務に精勵した父帝の數々の治績を記録したものであつた。その一節に、賤民開放の事は、次ぎのように記るされている。

明初より、紹興に惰民あり。靖難の後、諸臣の命に抗せし者、子女は多く山西に發して樂戸と爲す。數百年來、

相い沿いて革めず。一旦籍を去つて良民と爲す。命下るの日、人皆流涕す。

この惰民・樂戸の他にも、清朝初期には、所謂「四民」以下の民として現に賤視されつゝある――若しくはその可能性をもつ――人間の集團が、幾つか存在していた。即ち、浙江紹興府一帯の九姓漁戸、蘇州屬縣の丐戸、廣東地方の蜑戸・寮民、福建・浙江・江西三省の棚民、安徽の徽州・寧國・池州各府下の伴僮・世僕などがそれであるが、これらの賤民を、その賤籍から解放して良民とする事は、雍正帝の一貫した方針であつた。そしてその成果については、帝自身、これを他の諸政策――たとえば、養廉銀・營運生息銀制度の設定、耗羨の提解などとともに、善政の一つとして、心中密かな誇りを感じていたようであつた。以下、この一

連の處置について、個々の賤民別に、その具體的史實を提示してみよう。

## 二

(1) 樂戸。別に樂籍・樂工・教坊ともよばれ、直隸・山西地方に多い。文字通り歌舞音曲を業とする民であるが、その存在は、かなり古くから記録されている。たとえば、俞正燮の癸巳類稿卷十二「除樂戸丐戸籍及女樂考附古事」によれば、左傳襄公二十三年の條にみえる斐豹の身分をはじめとして、以後歷代にわたつて、殺人犯・盜賊・謀叛人らの妻子・或いは亡國の民を、樂籍に入れて娼優とした事例が列擧されている。即ち、彼らは、時の政治的支配者にとつては、その統治の枠外にはみ出た者と、その子孫であつて、職業は多く世襲され、時代とともに一つの身分として固定したと思われるが、彼らが直接清初の樂戸につらなるとは考えにくい。同じく樂戸と云つても、社會の變動によつて、激しい入換えが行われたに違いない。

清初の樂戸について、先きに引いた世宗聖德神功碑は、これを明初・靖難の變に際し、成祖の篡奪に反抗した者の

子孫と述べていたが、これは、嘉慶大清會典事例の樂戸開放を記した部分も同様である。

山西等の省に、樂戸の一項あり。原より忠義の後に屬す。其の先世は、明の建文の末、篡立に附せざるを以て害を被るに因り、遂に荼毒に遭い、編して樂戸と爲る。世世子孫、自ら拔れて良民と爲るを得ず。(同書卷百三十四)

樂戸の祖先に關する右のような見方は、明初、太祖と成祖が、江南地方から華北各地に住民を徙した歴史事實と結びついて生れた風説かとも思われ、確證には乏しいが、癸巳類稿に引かれていた事例などを考えあわせる時、樂戸を、少くともその一部を、靖難の變に際して節に殉じた者の子孫とするのは、全く根據のないつくり話ではなかつたはずである。そして、乾隆平陽府志なども「晋の樂戸は、自りて始まる所を知らず。」(同書卷二十九・風俗)と云いながら、やはり一説として紹介しているところを見ると、當時こうした見方が、かなり廣く行われていた事がわかるのである。樂戸はその名が示すとおり、主として歌舞音曲などの賤業に従事する民である。彼らの生活について、光緒山西通志<sup>(1)</sup>が大同府志を引いて云うところによると、山西地方の農

村には、立春の前日、この年の豊作を祈る祭を行う風習があり、この日には、優人樂戸が歌をうたい、踊りをおどつていたが、樂戸が解放された雍正元年以後には、彼らに代つて人が雇われたと云う事である。又、阮葵生の茶餘客話卷二「樂戸惰民丐戸之世襲」の條には、樂戸開放に關する御史年熙の上奏を引いて

山西兩省の樂戸は、別に籍貫を編し、世世子孫、勅して娼と爲さしむ。紳衿地棍、呼召すれば即ちに來つて酒を脩む。間一二の恥を知る者有りて、必ず相い容ぜず。

と云つてゐる。更に、彼らの一部は、選ばれて禮部所屬の教坊司や各王府に隸し、殿廷の朝會・燕饗の音楽を擔當した。沈德符の萬曆野獲編卷二十四「口外四絶」の條によれば、大同の代簡王府には、他藩に數倍する樂戸が屬しており、やや減少したとは云うものの、現に花籍にある者、なお二千人を數えたとき、京師の内外にも、大同の籍からあふれ出た流寓の樂戸が多かつたと記るされている。

教坊司若しくは各王府に隸屬する樂戸には、それぞれ生活の保證があつた事は云うまでもないが、地方在住の樂戸は、本業としての歌舞によつて生計をたて、その或る者は、

生活資料として最低の土地を持ち、本業を子孫に傳えながら生活してゐたと思われる。呂坤が山西巡撫在任中（明・萬曆十九年十二月～同二十一年五月）に書いたとされている實政錄卷四所収の「民務」の一節、「禁諭樂戸」の條は、山西地方の樂戸に對する處置十一條を述べたもので、各州縣に籍を有する樂人は、その中から樂首を選んで統率させる事、樂戸が良民と喧嘩した場合には加倍問罪すべき事、娼優・樂戸は良民と同じ服裝をし、身分相應の品物を持つてはならない事、樂戸は良民を買つたり勾引したりして、これに賤業を強制出來ない事など、樂戸に對する嚴しい差別を規定しているが、その最後の一條は、次ぎのようなものであつた。

一、樂工の地を有する者は、既に糧差を納む。又、朝賀・祭祀・接官など、一歳のうち官に在ること一ヶ月を減らす。原より工食なければ、丁銀は出すを免す。蓋し、下三則の戸は、力差・銀差の二者、並びに出すの法無ければなり。

これによると、樂戸の中には、土地を持つて農耕を営みながら、相傳の技藝をもつて官廳の役に應ずる者があり、

統治者の側でも、彼らを、税役關係の分野においては、下三則の一般人戸と同様に取扱う態度を示していた事がわかる。この事實は甚だ重要であつて、樂戸の或る者が、少くとも明代の末期には、その生活の内容において、殆ど一般下層農民と變らぬものを持つていた事を示している。しかもこの風調は、次第に擴がりつつあつたらしく、解放令施行直前の樂戸については、

今の樂戸爲る者、亦た田宅を有し、亦た丁徭有り。亦た稼穡に務め、亦た勤儉を知り、良民と異る無し。(乾隆平

陽府志卷二十九・風俗)

と云う記述もあつて、彼らに對する社會的差別が、觀念的にはともかくも、職業及び實生活の面では、徐々にくずれる傾向にあつたとみる事が出來よう。

雍正帝の賤民開放令は、雍正元年(一七二三)四月に發せられ、ここに樂戸は、戸籍の上では、完全に開放される事となつた。實錄は、この事を雍正元年四月戊辰の條に記載しているが、これは、帝が前年十一月、父・康熙帝のあとをついでから、六ヶ月もたたぬ間の事であつた。雍正元年七月十一日付の巡視兩浙鹽課噶爾泰の奏摺は、もともと墮民・丐

戸の開放を上請したものであるが、先例として樂戸開放の事にも觸れ、同年三月、御史年熙が、樂籍を削除して風俗を正さん事を題請して准るされたと記るしており、蕭爽の永憲錄にも、浙江道監察御史年熙の上奏に従つて、山西陝西地方の樂籍を開放した事情がみえてゐる。<sup>(8)</sup>

ただこの場合注意しなければならないのは、その開放があくまで戸籍面での事にとどまり、改業して良民と爲す事が、必ずしも彼らを賤業からも解放して、社會の基本的經濟機構にくみ入れる事を意味しなかつた事である。開放令は、この點については何らの具體的處置をも伴っていない。したがつて、樂戸自身にとつては、この開放令によつて、賤業をすて正業につく可能性が急に増加したわけではなかつた。とするならば、たとえ身分は良民であるにしても、生活の必要上、在來の職業を、にわかに放棄するわけには行かなかつたはずである。そして、歌舞音曲を賤業とみ、これに従事する者を身分不清白とする觀念は、依然として存在しつづけたから、彼らがその賤業を棄てない以上、當然社會的な賤視はやまなかつたと思われる。

ところで、この開放令に先立つて、教坊司所屬樂戸の解

放は、何回か試みられていた。明代には、宣德十年<sup>(一三四)</sup>英宗即位の時、樂工三千八百餘人を開放しており、又、景泰七・八年<sup>(一四五)</sup>にも樂工を開放しようとしたが、景宗の退位によつて實現をみながつたと云われている。<sup>(4)</sup>清朝でも、教坊司所屬の樂戸を、その宿命的な仕事から解放し、宦官、或いは音樂に精通した者を選んで樂工とする方針が、すでに順治年間から採用されていて、如何なる理由に基ずく處置であるか、よくはわからないけれども、これらを樂戸開放の前段階と考えるならば、雍正帝のこの施策は、その延長線上において理解すべきものであらう。

樂戸は、こうして一應戸籍上では良民たる身分を獲得したが、その後四十八年をへた乾隆三十六年<sup>(一七二)</sup>彼らの報捐應試の事が、更めて問題となつた。五十年に近い歲月が官吏となるに必要な三代清白の條件を滿す元樂戸出身者を生み出したからであらう。この時、禮部が議して准るされた施行要領<sup>(6)</sup>によると、報官改業、即ち正式に解放された人から數えて四代目にあたり、本人はもとより、親族悉く賤業に従事していない者に限つて、報捐應試を許可すると定められ、開放されていても、この條件に適合しない者には、

萬人の師表たる官吏への路は、依然として鎖されたままであつた。そしてこの場合、特に勢豪土棍が、口實を設けて彼らの志をはばむ事を禁ずる規定を附加しているが、それは、地方人の身分制の混亂を忌む感情からおこるであらう紛擾を豫想した處置であつたと思われる。なお、これらの規定は、丐戸・蠶戸・九姓漁戸・その他の元賤民に對しても準用される事になつてゐる。

### 三

(2) 墮民。隋民・惰民などと書れる場合もあるが、彼らに對する解放令は、樂戸より五ヶ月おくれで、雍正元年九月に發せられた。<sup>(7)</sup>先きに引いた雍正元年七月十一日付の噶爾泰の奏摺が墮民の開放を奏請したものである事は、前述のとおりであるが、これに對して雍正帝は、「該部議奏せよ」と硃批しているから、禮部の議覆をへて、九月に實施される事となつたのであらう。

墮民の過去については、彼らを宋時代の罪人・俘虜の子孫とする説が一般的で、たとえば、嘉靖山陰縣志卷三・風俗の條には、

四民の外に丐戸なる者有り。例として良民と相い婚姻するを得ず。處世久遠にして其の従りて始る所を知らず。

或いは曰く、宋罪俘の遺有りと。名づけて墮民と曰う。

(郷都に散處するも、會稽に居る者尤も多し)

とあり、乾隆紹興府志卷十八・風俗にも同様の記載がある。又、噶爾泰の奏摺<sup>(8)</sup>も、土地の者に尋ねたり、紹興の志書を調査して、これらの記載と全く同じ結論に達したと云つてゐる。一方、墮民の間には、自分たちは宋の將軍焦光瓚とその部下の子孫で、先祖が宋に叛いて金に投じたため、墮民とよばれて賤視されて來たのだと信じられていたらしく、一説には、元朝滅亡の際、明に降つた寧波府城駐屯の蒙古兵の後裔であつたとも云われている<sup>(9)</sup>。丐戸即ち乞食の家とは、その戸籍上の呼稱である。

更に、萬曆野獲編卷二十四にも「丐戸」の一條があつて大要次ぎのような事が記るされている。浙東の丐戸は俗に大貧ともよばれるが、彼らは乞食ではないし、又、必ずしも貧乏であつたわけではない。その本名を惰民と云うが、これが訛つて大貧となつた。男は婚禮・喪儀の手傳い・牙儉を、女は髮結いや結婚式當日の附添女<sup>(10)</sup>などをして暮して

いるが、彼らには讀書・纏足は禁じられ、良民との通婚は許るされず、たとえ巨萬の富を築いても、捐納によつて官吏となる事は出来なかつた……云々。

墮民は紹興府屬の各縣に分散居住する賤民であるが、その數は、嘉慶山陰縣志卷一・風俗の條に云うところを信ぜれば、「萬を以て計る」、即ち數萬を數えた。その生業について、祝儀不祝儀の手傳い・牙儉・髮結いの他、蛙捕り、錫賣<sup>あぶ</sup>り、厄拂い、歌舞など、かなり廣範圍にわたり、彼らに對する社會的差別も、日常生活の細部にまで及んでいた。即ち、野獲編にみえた諸事實に加え、如何に金持ちでも糧長・里長に充てられる事はなく、服裝についても特別の帽子・着物を指定され、一般人からは同座する事も、時には商取引さえも拒まれる場合があつたらしい<sup>(11)</sup>。

そして、墮民に對するこれらの差別は、當時の社會慣行の中において、強力な規制力を持つていたようである。たとえ墮民でなくても、周圍からその烙印をおされたならば、人人はそれに伴う社會的差別を甘受しなければならなかつた。それについて、野獲編「丐戸」の條に、次ぎのような話が傳えられている。明の萬曆の頃、北京に紹興出身の一

人の醫師が開業しており、その名を甄某と云つた。彼は名醫で、その診察を求める人はひきもきらず、したがつて次第に資産家となつた。そこで彼は、捐納によつて京衛經歷の官を得、近くその職を授けられる事となつた。ところが、同郷の官吏の中に、彼の祖先が大貧即ち墮民であつたと云いふらす者があり、彼は極力その事實無根なるを辨明したが、同郷の人々がこぞつて排斥するので、遂に官につく事を断念し、元通り町醫者の生活にもどつたと云うのである。

墮民に對する差別は、このようになりに厳しく守られたが、清初においては、すでに服裝の區別はほぼ崩れていたらしくて、「而して籍と業とは、今に至るまで亂れざるに、服は則ち稍や僭りて亂れたり」と云われ、更に墮民の中には、その黨を集めて訴訟をおこし、良民を凌ごうとする者も現れ、然もこうした風潮が擴大しつつあつた事が、乾隆紹興府志・風俗の條には注意されている。

以上が開放令施行當時における墮民の姿であるが、開放令が彼らの日常生活に決定的な變化を與える程の效果を持たなかつた事は、樂戸の場合と同じであつた。光緒上虞縣志は「乃ち國家寬恩を以て相待するに、丐戸は卒に改業自

新するを肯ぜず」(同書卷三十八・風俗)と云っているが、彼らの地位や身分・生活が、二百年の後まで、殆ど變らなかつた事は、魯迅の評論集・淮風月談に収められた「我談墮民」と題する一文が、何よりも雄辯に證明している。魯迅は、その幼少年時代、故郷の紹興で見聞きした墮民について、次ぎのように書き記したのである。

「紹興の墮民は、すでに解放された奴隸である。この解放は雍正年間の事だろう、もつとも斷定は出来ないが。だから、彼らはみんな、すでに別の職業を持つてゐる。もちろん賤業である。男たちは古手買いをし、鶏の毛を賣り、青蛙を捕え、芝居をしたりする。女は正月や節句になると、彼女が主人と認めている家へ行つて祝いを述べ、おめでたや不幸があると手傳いをする。ここになお奴隸の名残りを留めている。事がすむとすぐ歸り、かなり澤山のお禮を貰う。これから見ても、かつて解放されたものである事がわかる。それぞれ墮民の出入りする主人の家は決つていて、勝手に何處へでも行けるわけではない。姑が死んだら息子の嫁を行かせ、あたかも遺産のように、次ぎの世代に傳える。非常に貧乏するかして、出入りする權利を、他人に賣



り渡してはじめて、舊主人との關係は絶える。若し、理由もないのに、來るなど彼女に云つたとすれば、それは彼女に重大な侮辱を與えたに等しい。……」

魯迅のこの記憶は、民國蕭山縣志稿卷一・疆域門・風俗の條の記述ともほぼ一致している。

(3) 丐戸。墮民が別に丐戸とよばれた事については、すでに觸れたが、同じく丐戸の名でよばれる賤民が、紹興に近く、蘇州の屬縣である常熟・昭文兩縣下に住んでいた。彼らについては、據るべき史料が乏しく、その來歴・生業などは全く不明であつて、ただ彼らに對する解放令施行の事實だけしかわからない。

(雍正) 八年、覆し准るざる。江南蘇州府屬の常熟・昭文二縣の丐戸は、浙江の墮民と異る無し。沿海に族居して、久しく沉淪に陥ちいる。其の丐籍を削除して、同に編氓に列するを准るせ。(嘉慶會典事例卷百三十四)

これによつて想像すれば、墮民と大して違わぬ存在であつたのであろう。なお、この開放令について、茶餘客話の記載によると、蘇州巡撫尹繼善が、丐戸の開放を奏請したとある。(同書卷二「樂戶惰民丐戸之世襲」)

(4) 九姓漁戸<sup>44</sup>。浙江省には墮民の他に、もう一群の賤民があつた。九姓漁戸とよばれる錢塘江の水上生活者である。

彼らの祖先は、元朝末の叛亂に、一方の旗頭として活躍した陳友諒とその部下で、明の太祖朱元璋の統一事業に反抗したため、叛徒として賤視され、以來陸上の生活を禁じられ、すべて舟に乗つて生活する事を強制されるに至つたと傳えられている。九姓とは、彼らが陳・錢・林・李・袁・孫・葉・許・何の九つの姓を持つ人間によつて構成されている事に基ずくと云い、漁業の他、錢塘江を中心とする江南の水域に舟運業者として活動し、その數も、盛時には二千餘隻、清朝末期でも一千餘隻を數えたとされている。その女性の中には、妓女となる者も多かつた。

ただ、彼らに對する開放令については、實錄・會典などには記るされておらず、一應解放の事實を疑ふ事も可能ではあるが、乾隆三十六年六月の、解放賤民に對する捐納應試許可令の施行要領には、

廣東の蟹戸、浙江の九姓漁戸、及び各省の凡有る此の似き者に至りては、悉く該地方官に令し、此に照して辦理せしむ。(嘉慶會典事例卷百三十四)

とあるから、やはり彼らも、すでに戸籍上では解放されていたと考えるのが妥當であろう。清代になつて解放されてからは、陸にあがつて農耕に従事する者も現れたとは、民國浙江新志の記載である。

(5) 蟹戸。<sup>(四)</sup>別に蟹民或いは龍戸・裸跪ともよばれ、廣東を中心としながら、福建にかけて住む水上生活者である。彼らの系譜をたどると、南夷の一種で、そのはじまりは遠く唐・宋時代にまで遡ると云われているが、詳しい事はわからない。傳統的に賤視され、陸上の生活をゆるさず、終世舟の中で暮らし、漁業や舟運を業としている。

蟹戸に對して雍正帝は、すでに即位の初年から關心を持つていたらしい。即ち、雍正二年九月八日の日付を持つ兩廣總督孔毓珣の奏摺<sup>(五)</sup>には、かつて彼の奉つた奏摺が返されて來て、硃批三道を捧じたところ、その一つに、「廣東の蟹戸は埠次を編立して約束せよ」とあつたとみえている。

しかし、より積極的な施策は、雍正七年まで待たねばならない。雍正七年<sup>(二七)</sup>五月、帝は廣東方面の總督巡撫に諭して、蟹戸を賤視する謂れなしとし、その開放を命じた。上諭は次ぎのように云つている。

……蟹戸は本より良民に屬し、輕賤擯棄すべきの處無し。且つ彼は魚課を輸納し、齊民と一體なれば、安くんぞ、地方の積習に因り、強いて區別を爲し、これをして飄蕩靡寧せしむるを得んや。該督撫等に著し、轉じて有司に飭して、通行曉諭し、凡そ無力の蟹戸は、其の在船自便するを聽して、必ずしも強いて登岸せしめず、如し力有りて能く房屋を建造し、及び棚<sup>カ</sup>を搭けて棲身する者は、其の近水の村莊に在つて居住せしめ、齊民と一同に甲戸に編列し、以て稽查に便ならしめ、勢豪土棍も借端して欺陵驅逐するを得ず。竝びに有司に令して蟹戸を勸諭し、荒地を開墾して播種力田せしめ、共に本に務むるの人和爲し、以て朕が一視同仁の至意に副へ。(實錄雍正七年五月壬申の條)

蟹民に對する捐納考試の許可については、先きに樂戸及び九姓漁戸の項で觸れた通りである。

こうして、蟹戸は雍正七年以後、良民となつたわけであるが、この開放令も、勸農への志向をもちながら、實際的には大した効果を持たなかつた如くで、つい最近まで多數の蟹戸が存続した事は周知の事實である。彼らが良民とな

ると、當然民丁五年編審の例によつて調査されねばならぬわけであるが、道光廣東通志<sup>(1)</sup>にみえる統計によると、蠶戸の編審は雍正九年にはじまり、乾隆六年には蛋丁八十五、同十一年には九十六、同十六年九十九、同二十一年百一、同二十六年百五、同三十六年百五と記録されている。彼らの人口が數萬乃至十數萬と概算されているのを思いあわせると、これではいくら何んでも少なすぎる。その原因は、幾つか考えられると思うが、この事實は、開放令の効果が、政治の實際面には、全くと云つていいほどあらわれなかつた一つの證據となるであらう。蠶戸の大部分は、依然として政治の枠外に放置されたままであつた。

#### 四

(6) 伴僮・世僕。右にみた賤民が、政治的・社會的賤視によつて社會の外に放逐され、生業においても、當時の基幹産業たる農業からは、殆ど完全にしめ出されていたのと違つて、身分的には一種の家内奴隸として賤視されてはいたが、社會的・經濟的には、重要な地位をしめつつあつたのがこの伴僮と世僕である。

伴僮及び世僕がその一種であるところの當時の家内奴隸は、家長に隸屬して、日常の勞役に従事する奴婢であつて、良民が賣買・典當・投靠・刑罰などの原因によつてこれとなり、恩赦・放良・贖身などの方法で解放されるまでは、その子孫とともに服役すべきものであつたが、明朝中期から、清初にかけて、江南地方においては、こうした家奴を養う風が特に盛んであつた。この事は、すでに顧炎武が、日知錄卷十三「奴僕」の條において指摘して以來、注目すべき現象と考えられて來た。彼の觀察によると、明以後、江南の士大夫の家には、家奴が多く養われ、官途につく者があると、自ら進んでその僕となる者が現れ(投靠)、家計を左右するとともに、主人の權勢を笠にきて威を振り、この地方の民生一般に大きな影響を及ぼしつつあつたと云う事である。

ところで、この現象は、明中期以來進行しつつあつた江南地方の大土地所有制と無關係ではない。即ち、自ら大地主でありながら、官界に足をふみ入れたため、直接生産的な經營に携わる餘裕を持たぬ官僚的寄生地主としての士大夫階級には、その資産を監督經營するために、擬制的家族

員としての家奴が是非とも必要であり、こうした社會條件の下において蓄えられた多數の家奴は、當然生産的な仕事、即ち農業や商業に積極的に従事する事となつた。したがつて、その中からは、經濟的な地位を利用して自己の資産を持ち、主人とは別個の自立的な地主商人となる者も現われ、家奴の内部にも、すでに階級分化がおこりつつあつた諸事實は、最近の研究が明らかにするところである。徐珂の清稗類鈔卷八十二「大姓買僕」の條には、當時の家奴について、次ぎのように記るされている。

徽州の汪氏・吳氏、桐城の姚氏・張氏・左氏・馬氏は皆大姓なり。恒に僕を買い、或いは營運せしめ、或いは耕鑿せしむ。これを久しくして積んで資を有すれば、即ち家僮と共に賤役には執かず。其の子孫は讀書進取し、或いは納資入官す。主もこれを禁ぜず。惟だ既己に身を賣りたれば、例として主の姓に従う。顯達に及べば、即ち主僕と稱せずして、主を呼んで叔と爲す。蓋し、同姓不婚を以て、後日連姻の弊を杜すなり。

こうした家奴の活動範圍のうち、當時最も活潑であり、又發展性をもつていたのは、商業の分野であつた。即ち、

江南徽州府は有名な新安商人の故郷であり、明清時代に、この地方出身の商人が全國の市場を舞台として活躍し、特に鹽商として大を爲した事はよく知られているが、この新安商人が、その商業活動の中で盛んに使用したのが、伴僮・世僕とよばれる家奴であつた。この事は、藤井宏氏の指摘するところであるが、同氏によれば、新安商人の經營機構内における伴僮・世僕の地位はかなり高く、主人の直接的監視を脱し、私有財産蓄積の機會もあり、すでに明の中頃には、主人に對して全面的に服従するを要しない實力を備える者もいたと云う事である。<sup>20)</sup>

このように、伴僮・世僕とよばれる者も含めて、江南地方の家奴は、身分的にはともかくも、當時における基本的乃至發展性ある産業活動に参加し、社會も彼らの活動にたよるところ極めて大であつたから、基本的産業からしめ出されていた他の賤民がうけたような差別は、現實には受けなかつたと考えられる。そして經濟的な實力の向上にともなつて、彼らの身分解放を求める運動が次第に激しくなり、明の萬曆年間から清の康熙年間にかけての江南地方においては、農民の反地代斗争とともに、抗租奴變と並稱される

重要な社會問題となりつつあつた。雍正帝の伴僮・世僕に對する解放令も、これらの社會現象と決して無關係ではなかつたはずである。

さて、雍正帝は、伴僮・世僕の解放を命じた上諭の中で、その見聞を次ぎのように語っている。

近ごろ聞くならく。江南徽州府には則ち伴僮有り、寧國府には則ち世僕有り。本地呼んで細民と爲し、幾ど樂戸・惰民と相同じ。又其の甚しき者は、如二姓の丁戸村莊相等しきに、而して此姓は乃ち彼姓の伴僮・世僕に係るとし、凡そ彼姓に婚喪の事有れば、此姓は即ちに往きて服役す。稍不合なる有れば、加うるに箠楚を以てす。及び其の僕役たるは何時より起ると訊くに、則ち皆茫然として考うる無し。實に上下の分有るに非らずして、相沿の惡習に過ぎざる耳。(實錄雍正五年四月癸丑の條)

右にみたような廣範圍な家奴の存在にもかかわらず、雍正帝の開放令が、ただ徽州・寧國兩府下の伴僮・世僕のみを對象とするものであつた事については、それ相應の理由があつたかと考えられるが、現在のところ詳しい事はわからない。ただ、上諭に應じて、禮部が議覆した安慶巡撫

魏廷珍の上奏の内容は、次ぎのようであつた。即ち、紳衿の家の典買した奴僕のうち、現に契約書もあつて贖身していない者については、本人及び其の子孫は、依然として奴僕とする事。すでに贖身しても、本人と、彼が主家にある時に生まれた子供には、主僕の名分を存し、主家にあつて生んだ子でない者に限つて良民とする事。奴となつて年代がたち、契約書も失われていて、現に主家の蒙養も受けていない者は、世僕として扱うを得ない事……。

この議覆は翌六年(一七二八)二月裁可をへて施行される事となるが、この場合彼らの性質上一律の開放ではなく、個々の條件を考慮し、根據ある者の開放を許るさなかつた事は、彼らが社會經濟的に果しつつあつた役割とも考えあわせて、注目してよい現象であらう。

ところが、條件付きの解放であつたから、その施行にあつては、様々の紛争が生じるのも亦、やむを得ない事であつた。たとえば、江南安慶按察使劉枬の奏摺によると、文を奉じて施行して以來、現に契約書があつて僕たる者と、附居佃田してはいるが僕でない者に對しては、通達どおり實施しているが、年代も古く契約書も失われている場合に

は、主家の養育を受けているか否かをめぐつて、争いや訴訟が絶えないと云つてゐる。こうした主家と家奴との對立は、所謂奴變の風潮とも結びついて、一層激しかつたろうと思われる。開放された伴僮・世僕に對しても、嘉慶十四年にはじめて、三代清白の條件をつけて、官吏となる路が開かれてゐるが、その上諭の一節には、

……其の典身賣身の文契は、率ね遺失して存する無しと稱し、其の服役出戸の年分を考うるも、亦た俱に實を指すに従<sup>よ</sup>し無し。特に其の捐監應考等の事有るに遇えば、

良賤を分別するを以て辭と爲し、疊<sup>かさ</sup>ねて訐控を行う。而して被控の家も、戸族蕃衍なれば、又悉くは汚賤に甘んずるを肯えんぜず、案牘繁滋し、互相仇恨す。……(實錄

嘉慶十四年十二月庚戌の條)

と云つて、彼らがその實力を背景として、主家若しくは一般良民と對抗していた様子を傳えている。

## 五

(7)棚民。彼らは、少くとも雍正時代においては、賤民とはみなされてはいなかつた。雍正五年十月十一日付の浙江

巡撫李衛の奏摺は、この棚民について、次ぎのように云つてゐる。

夫れ棚民は淳頑等しからざるも、原より盡くは盜と爲らんとて來りしには非らず。皆福建江西の貧民にして、本地は人多く田少なければ、養活する能わざるに因り、故に相率いて外方に就食す。今三十餘年を歷たり。(雍正硃批諭旨)

この記述によつて明らかな如く、彼らは一種の流民であり、その居住範圍は江西・福建・浙江三省にわたつてゐるが、移住者としての型態も甚だ複雑であつた。右の記述に續く李衛の言によれば、

其の中には、先ず簞を攜えて來る者有り、種地獲利して家簞を搬取して同居する者有り、又住居すること年久にして田地を置買し、並びに本地の民間と婚姻を結聯する者有り、此等は皆籍に回らず。惟だ内に室家無きの輩有り、年終には回去し、數人を留下して棚を守らしめ、次年復び來る。……

とあり、又、江西巡撫斐倬度の奏摺には、

江省の棚民は、由來已に久しく、……各同じからざる有

り、入籍年久にして現に納糧當差する者有り、入籍久しからずして去留定めなき者有り、遠く山箒に在りて星散各居する者有り、土民の其れを僱いて傭工となし、地主の其を招いて墾田せしむる者有り、山主其の力作を利とし曲げて隱庇を爲す者有り。(諭旨・裴偉度・雍正二年三月二十八日)

と云われている。これらの棚民のうち、當初より移住地に入籍して本地人と交わり、更に税役を負擔した者は、決して賤民とはみなされていなかった。即ち、實錄雍正九年二月壬寅の條によれば、棚民のうち入籍する事二十年以上に及び、且つ田廬墳墓を有する者には、居住の州縣において科擧に應ずる事を許し、府州縣學の定員も、棚民童生の數に應じて増員する處置がとられているから、これを他の賤民の場合と比較するならば、彼らが、賤視されていなかった事は明らかであろう。

しかし、同じく棚民の名でよばれる移住民の中には、本地人の間にもとけ込まず、一般社會の外に流移し、各州縣の山寄りの土地に據つて、麻・靛・煙草・香料などを栽培するかたわら、炭焼きや紙造りなどをして暮す者があつた。

棚民即ち小屋掛けの民と云う名は、多分その生活様式から生れたと思われるが、彼らと本地人との距離は、次第に大きくなる傾向にあつた。李衛はこの原因を地方官の立場において、以下のように表現している。

……棚民は姦良齊しからず、去來定めなし。墾する所の蕪山、數年の後には、地力盡き易く、又復新土を翻墾して、塚墓を損傷す。且つ性情粗頑にして、衆を倚たんで爭鬪し、動輒兇を逞としくす。若し歉收の年に遇えば、竊盜して匪と爲る等の弊有り。……(諭旨・李衛・雍正五年十月十三日)

本地人が彼らに對して友好的であつたとは考えられないし、紛爭の原因は、もちろん本地人の側にもあつたはずであるが、とにかく、こうした紛爭や、習慣の違いなどが、兩者の距離を擴げる最初の要因となつた。こうして出來あがつた棚民別視の條件に加えて、山間の流民にとつてはやむを得ない生活の貧しさ、若しくは焼畑農法を思わせるその生産技術の低さなどが、これに拍車をかけ、次第に一種の賤民が生れる事となつたのであろう。

清初における滿州・蒙古・四川・陝西方面への移住民が、

別に原住民と大した紛争もおこさず、賤視もされずに定着して行つたのに對し、これらの棚民は、本地人との對抗關係において右のように劣勢であつたため、社會の外に放逐され、彼ら自身も、山の中で特殊な集團を形成して生活する事が多かつたから、遂に一種の賤民とみなされるに至つたものと考えられる。雍正年間には、彼らを賤民と扱つた記録はないが、清國行政法が棚民を賤民の一つとみなしているのは、このような経過をへて、清朝末年には、彼らが完全な賤民となつていた事を示すものであらう。賤民が、社會的につくり出される一つの型と考える事が出来る。

このように、雍正帝の治世においては、棚民は、政治的にも社會的にも、賤民とはみなされていなかった。したがつて、統治者としても、彼らを流民として扱い、これを支配體制の中に把握しておく事だけが必要であつて、その開放を云々する餘地はなかつた。棚民問題に對する帝自身の見方は、次ぎのようであつた。

浙・閩・江西等省の棚民有るの州縣は、朕皆留心して牧令を揀發して前往し、化導董率の任を司らしむ。蓋し、此等無業の民人は、聚散常無く、往來定め無し。其の間

良頑一ならず、姦を藏し易し。若し稽察稍疎なれば、必ず漸く閭閻の擾と爲るに至らん。……（實錄雍正十三年七月戊申の條）

こうした考え方を基礎として、棚民を現地の保甲に編入せしめ、地主・山主や保長・甲長らを通じて、州縣官に稽察させると云うのが、その棚民對策であつたが、事の重要性について語つた帝の言葉は、雍正硃批諭旨の中に幾つか傳えられている。二・三の例をあげてみると、「朕御極の初め、江西・浙江棚民の一事の爲めに、屢ば經に該督撫に嚴諭し、法を設けて料理せしむること雷に再三ならず……」（張垣麟・雍正六年十二月三日）とか、「汝等大吏、但だ此種棚民を將つて視て地方の要務と爲し、不時に留心察訪すれば、則ち諸患自ら消え、相安んじて事無からん。」（李衛・雍正五年四月十一日）などと云つていのである。なお、こうした雍正時代の方針にならつて、乾隆年間にも、二回ばかり棚民稽查の法を定めた事が史書に記録されている。

(8)寮民。廣東地方の山の中に住む賤民的要素を持つ貧民である。彼らの生活については、

廣東の州縣には、山に入つて寮を搭け、香木春粉を取り、



柴を砍り炭を焼いて業と爲す者有り。……（嘉慶會典事例 卷百三十四）

とあるが、寮民とは、棚民と同じく小屋掛けの民と云うほどの意味であろう。ただ、彼らに關しては、棚民ほどの史料がのこされていないから、詳しい事は不明であるが、彼らも、雍正・乾隆以後は一様に保甲に編入され、寮長を設けて鈴束させる一方、地主が彼らを招いて小作させる時には、寮丁の名を届け出で、又、彼らが官有地に入る場合にも、官に申告すべきものと規定された。

## 六

以上は、清初における賤民乃至賤民的要素をもつ人間集團の歴史と生活、彼らに對する雍正帝の一連の處置を列舉したものであるが、賤民開放令のもつ意味について、帝自身は、自ら次ぎのように述べている。

朕は移風易俗を以て心と爲す。凡そ習俗相い沿いて振拔する能わざる者は、咸與うるに自新の路を以つてせり。

山西の樂戸、浙江の惰民の如く、皆其の賤籍を除ぎ、良民と爲らしむるは、廉恥を勵め、而して風化を廣むる所

により。（實錄雍正五年四月癸丑の條）

雍正帝が、この一連の賤民開放令に期待したものが何であつたか、この言葉は、それをはつきりと表わしている。

それは必らずしも、帝自身が考え出したものではなく、進言者として何人かの地方官も登場するが、即位の初年から一貫した方針の下に開放を命じた雍正帝の態度の中には、社會問題に對する關心の鋭さを見る事が出来るように思われる。それは、自ら云うように、統治者として「廉恥を勵め、而して風化を廣むる」ために爲されたには違ひないのであるが、一方、伴僮や世僕などは例外として、成立の過程において、清朝とは全く何らの關係も持たなかつた賤民に對する、專制君主の恩寵の現れであつたかも知れないし、又、天子の下においては、萬民は平等でなければならぬとするその統治理念の反映であつたかも知れない。更により積極的には、賤民への差別が、何らかの地方的な紛争をひき起す事を豫防せんとする、實際的な要求から出たものとみる事も出来るだろう。そして、これらはいずれも、帝の抱負の一端をそれぞれ幾らかづつ云いあてていると思うが、こうした雍正帝の意圖に反して、開放令が、實際的にはそ

れ程の効果をあげなかつた事も否定するわけにはゆかない。

即ち、或る面では次第に崩れつつあつたかにみえる賤民への社會的な差別を、強化する方向ではなしに、これを無くしようとした開放令の時代的な進歩性は、それが當時の身分關係を、政治的に單純化した事實とともに、もちろん認められねばならない。しかし、それがただ戸籍面での開放にとどまり、彼らをその賤業からも開放して、社會の基本的な階級關係の中に組み入れるための何らの具體的處置を伴つておらず、したがつて、墮民や鹽戸の場合に特徴的にみられたように、彼らの大部分が、そのまま賤視されて近年に及んだのも亦、動かしがたい事實であつた。然も、賤民を開放して風俗を正さんと志した帝の時代に、新しい賤民としての棚民が、次第に形成されつつあつたのは、皮肉な現象であつた。

そして、開放令の實際面における効果が、右にみたようなものであるかぎり、それは、雍正帝の善政の一つとして評價出来るとしても、社會に及ぼした影響と云う點については、否定的な評價しか與えられないであらう。主として帝の個人的關心に發したと考えられる政策の、當然の歸結

であつたかも知れない。

# 註

- (1) 光緒山西通志卷八・風土記上・歲時。
- (2) 明史卷六十一・樂志一。同卷七十四・職官志・教坊司。皇朝文獻通考卷百七十四・樂考・俗部樂。
- (3) 雍正硃批諭旨・噶爾泰・雍正元年七月十一日。永憲錄卷二上・雍正元年四月の條。
- (4) 萬曆野獲編卷一・“釋樂工夷婦”。茶餘客話卷四“教坊司”。
- 癸巳類稿卷十二“除樂戶丐戶籍及女樂考附古事”。
- (5) 皇朝文獻通考卷百七十四・樂考。
- (6) 實錄乾隆三十六年六月庚申の條。嘉慶大清會典事例卷百三十四。
- (7) 實錄雍正元年九月丙申の條。墮民開放の經緯は、永憲錄卷二下・雍正元年八月の條に詳しい。そこには奏請者として、巡鹽兩浙監察御史鄂爾泰の名がみえているが、これは硃批諭旨にあるとおり、噶爾泰が正しい。
- (8) 註(3)。
- (9) 註(3)。嘉慶山陰縣志卷一・風俗。
- (10) 民國浙江新志第七章・特殊民族。
- (11) 註(3)。乾隆紹興府志卷十八・風俗。
- (12) 江南地方における結婚式の介添女は、紹興では喜婆、寧波では送娘子とよばれ、いずれも墮民の女がなつたが、蘇州地方では、喜娘と云つて良民の子女がこれにあつた。(清稗類鈔卷八十

(13) 註(3)。乾隆紹興府志卷十八・風俗。嘉慶山陰縣志卷十一・風俗。

光緒餘姚縣志卷五・風俗。永憲錄卷二下・雍正元年八月の條。

(14) 民國浙江新志第七章・特殊民族。

(15) 實錄雍正七年五月壬申の條。民國浙江新志第七章。

(16) 雍正硃批諭旨、孔毓珣、雍正二年九月八日。

(17) 道光廣東通志卷九十一・輿地略九・戶口二。

(18) 清國行政法第2冊81頁以下。

(19) 宮崎市定・明代蘇松地方の士大夫と民衆(史林37・3) 佐伯

有一・明末の董氏の變(東洋史研究16・1) 小山正明・明末

清初の大土地所有一(史學雜誌66・12)

(20) 藤井宏・新安商人の研究三(東洋學報36・3・82頁以下)

(21) 實錄雍正五年四月癸丑の條。

(22) 雍正硃批諭旨・劉構・年月不詳。

(24) 清國行政法第2冊107頁。

(25) 雍正硃批諭旨・李衛・雍正五年四月十一日。

(26) 實錄雍正九年二月壬寅の條。雍正硃批諭旨・趙弘恩・雍正十二年六月二十五日。

(27) 雍正硃批諭旨斐律度・雍正元年四月二十一日。同雍正二年三月二十八日。李衛・雍正五年四月十一日。

(28) 雍正時代の棚民對策については、硃批諭旨特に李衛・趙弘恩・斐律度の項に随時みえてゐるが、中央での制度化については、皇朝文獻通考卷十九戶口考と嘉慶會典事例卷百三十四に記載されてゐる。ただ會典事例が乾隆四年として記録する一條は、筆者の考へでは、雍正四年の誤りではないかとみられるのであるが、詳しい事はわからない。後考にまつ。

(29) 皇朝文獻通考卷十九・戶口考。註(28)の會典事例の記載が史實であるとすれば、三回行われた事になる。

(30) 嘉慶大清會典事例卷百三十四。

一九五九年十月二十日稿了

## On the Regulation of Thoughts for the Early Ch'ing 清

*Kazuko Ono*

Under the declining Ming 明 dynasty, young literati fought against the Nei-kuan 內官, calling their union, Shê 社. After the destruction of Ming, many of the Shê formed part of the anti-Manchu movement. The Manchus began to regulate this movement in the Shun-chih 順治 period. As the result, the Shê changed their character from political union into assemblies of literati, training in Shih-wen 時文 or studies in textual criticism. After the middle of the K'ang-hsi 康熙 period, the Manchus undertook to conciliate the anti-Manchu movement both through editing Chinese books and moral education at schools. Finally, the movement of the young Chinese literati grew to be faint and be unpolitical, and the anti-Manchu movement was succeeded by the secret societies of the lower classes.

## On the Emancipation of the Lower Orders by the Yung-chêng Emperor

*Takanobu Terada*

In the early period of the Ch'ing 清 dynasty, there lived several kinds of persons of inferior social status, called Yüeh-hu 樂戶, To-min 墮民, Kai-hu 丐戶, Chiu-hsing-yü-hu 九姓漁戶, Tan-hu 蠶戶, Liao-min 寮民, P'eng-min 棚民, Pang-tang 伴傭 and Shih-p'u 世僕. One of the most important policies of the Yung-chêng emperor was their emancipation. The author tries to uncover the details of these reforms.

## The Currency Problem in the Yung-chêng 雍正 Period

*Tomi Saeki*

Since the beginning of the Ch'ing 清 dynasty till the middle of the Ch'ien-lung 乾隆 period, which included the Yung-chêng period, the price of money tended to go up in general due to the lack of Chih-ch'ien 制錢. This shortage rose because the net price of raw copper, imported from Japan, was higher than the par price of Chih-ch'ien and it was illegally melted to product T'ung-kuo 銅鍋 or Yen-tai 煙袋. The lower officials and the soldiers were paid a salary with Chih-ch'ien, their housekeeping being on a small-scale like that of the peasants and requiring this. To secure the copper materials for Chih-ch'ien, the government intensified its prohibitions on the use of copper, while it began to mine copper in Yün-nan 雲南 province. Such a policy, created in the Yung-chêng period, gradually proved fruitful in the next Ch'ien-lung period and strengthened the stand of the dynasty.